

---

# 掌・ネオンテトラの恋

田中亮

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

掌・ネオンテトラの恋

### 【Nコード】

N2348K

### 【作者名】

田中亮

### 【あらすじ】

南米の大きな河に、二匹のネオンテトラが住んでいました。／彼らは幼馴染で、恋人同士でした。／彼らは互いに愛し合い、とても幸せに日々を暮らしていたのです。／そう、あの満月の夜に、運命が二人を引き裂くまでは。／「今君に会えなければ、もう二度と君に会えない」。

## 前説

本日は、ご来場頂きまして、まことにありがとうございます。私は今回作・構成・語りを勤めさせていただきました、田中亮と申します。宜しくお願いいたします。

さて、今回は私の突然の思いつきで、このような朗読会を行う事になったのですが、それには理由があります。

それは私がとても大切だと思う、一人の人に出会ったからです。先のこととはわかりません。もしかしたら、明日事故にあって、私はこの世にいなくなるかもしれないです。でも、そんな大切な人に出会えて、一緒にいられる今について、その喜びについて、書きたくてこの物語の筆をとりました。

今の世の中、繰り返すことの出来るいくつもの作品に溢れています。CD、ゲーム、本、そのどれもが、何度でも手に入るものです。けれど今回のこの朗読会は、そして、モニターの向こうであなたが耳を澄ましてくれているこの夜の下で、世界の片隅で、同じ時間をみんなで共有する今は、もう二度と訪れません。それは今の世の中にとつてとても貴重なものであると思います。

今日ここに来てくれてありがとう。精一杯大役を勤めさせていただきます。どうぞ、楽しんでいただきたいと思います。

それでは、物語の始まりです。

シーキュー、シーキュー。私の声が聞こえますか。私の声が聞こえますか。

第一回 Morning Park 朗読会。掌・ネオンテトラの恋。田中亮未発表小説・誘蛾灯より。作・構成・語り、田中亮。協力、掌・ネオンテトラの恋製作委員会。

この物語を、クミホさんに捧げます。

## 第一章 恋

二人は、とても仲の良い恋人同士でした。

大きな熱帯の河を、二匹の小さな魚が楽しそうに泳いでいます。それはネオンテトラという種類の魚で、南米の河に住んでいます。体長はメダカぐらいに小さく、透明なひれと色とりどりのきらきら光る銀の胴をしています。

二匹のうちの、もう一方よりほんの少し大きな、胴に一筋の赤い炎のような線の入った方が、テトラという名の雄のネオンテトラでした。そして、テトラよりほんの少し小さくて、ほとんど全身が青く銀色に光っているのが、リンという名の雌のネオンテトラでした。

「テトラ、私、なんだかとっても幸せ。」

「どうしたんだい？リン、突然そんなこといって。」

テトラとリンは手をつないだまま、晴れた海を泳いでいました。

そうそう、この物語の中ではこの河の事を、海と呼ぶことにします。なぜならこの河はとてもとても大きいので、そこに住む人々に、海と呼ばれていたからです。

「ううん。今、あなたが隣にいて、私と話をしてくれている。それだけでこんなにも幸せなんだって、あなたに、伝えたくて。」

リンは青い体を、少し赤く恍惚に染めて、答えるのでした。

「それなら、僕も幸せさ。リン。」

そういってテトラは、リンの手を握り、そっと抱きしめるのでした。

「やれやれ、まったくどうしたものかね。ちょっと長老！聞いているのかい？長老ったら！」

一匹の真っ赤な太ったネオンテトラが、真っ白なひげを腰まで伸ばした銀色のネオンテトラに向かって、むなびれを腰にあて、元から真っ赤なほっぺたをもっと赤く大きく膨らませながら騒いでいます。

「なんだいドニエプラ。私はまだ耳は大丈夫なんだ。そんな大きな声で言わなくても、聞こえてるよ。」

ドニエプラと呼ばれた赤い太ったネオンテトラが長老にさらに身を乗り出して言います。

「それならさ、長老！」

と、スツと長老と呼ばれた銀のネオンテトラは杖・・・のように見える水草の茎をドニエプラの口の前に押し出して言いました。

「ドニエプラ、もう良いだろう。好きなもの同士なんだ。好きにやらせてやればいいさ。うちらじゃあもうどうしようもないじゃないか。優しく見守ってやれよ。」

「うーっ。私はあんなね、テトラなんて親のいない拾い子なんて嫌なんですよ。リンは私が、私がたった一人で、手塩にかけて大事に育て上げた大切な一人娘なんだ。それをみすみす、あんなやんちゃ坊主のテトラなんかに・・・。私はほんとならもつと胴体の大きくて、ぎらぎら金色に光ってるガイなんか絶対良いと思うんだよ・・・ぶつぶつ・・・。」

長老はわめきつづけるドニエプラの声を聞くまいと、長いひげの先を丸めて、耳の中に詰め、うんうんと苦笑いを続けるのでした。

テトラは嵐の日に、長老が拾った子供です。この海では何年かに一度、とても大きな嵐が訪れるのでした。そして多くのネオンテトラの仲間達が死に、片親や親のいない子供が多く生まれます。テトラもそのうちの一人でした。その嵐の過ぎ去った晩に、月夜の下、水草の陰で、今にも消え入りそうな息で銀色の体を震わせているテトラを、長老が見つつけて連れ帰り、育てたのでした。

本当はテトラにも、ちゃんとした名前があります。けれど長老はそんなみなしごを何人も世話しているため、なかなか名前を覚える事が出来ません。テトラもテトラで、小さい頃は人よりも少し小さな体格ながら、やんちゃで方々を遊びまわっていたため、他の種類の魚達にテトラだぜ、テトラが来たぜ、などと呼ばれるうちになんだ

かそれがあたりまえのようになって、いつのまにか、テトラ、とまるで種類のような名前でもみんなに呼ばれるようになったのでした。

一方リンは、ドニエプラさんの一人娘として、大切に大切に育てられました。ドニエプラおばさんも、嵐で夫を無くしてしまった為、女手一つでリンを育て上げましたから、リンを目の中に入れても痛くないほどに可愛く思っているのです。

リンとテトラは、幼馴染でした。テトラはとてもやんちゃだったので、リンを良く危ない遊びに誘いました。二人は出来る限り海面まで出て、海を渡る大きな船の、赤や黄色、青や緑の色とりどりの明かりを見たり、遠く聞こえてくる楽しい音楽や、人間達の笑い声を聞くのが好きでした。

けれどそれをドニエプラおばさんが許すはずはありません。リンをホタテの貝殻で作った小さな檻に閉じ込めて、その上に座り込んで見張っています。

そんな時テトラは体中に色とりどりの水草をつけて、自慢の弾丸のような泳ぎで、海面からドニエプラめがけて飛び込んでいくのです。

そうするとテトラの体はまるで、餌を狙いに来た南米の鮮やかな色の鳥のように見えるのです。ドニエプラは驚いて一目散に岩場に逃げ込みます。

「さあ、今だリン。行くよ！」

「うん、テトラ。ごめんなさいお母さん、行って来ます！」

そうやってテトラはリンの手を取ると、凄いスピードでそこを後にするのでした。

「テ、テトラあんたまた！く、くやしいーいーいー！」

後にはいつも地団駄を踏む、ドニエプラの姿だけが残されるのです。

その大きな海を、二つに分けるように、それは人間によって、建設され続けていました。いくつもの柱が海の上にそびえ立っています。それは地図で見れば、まっすぐ縦につながり、その間にコンクリートの橋のようなものが取り付けられているのでした。

その上に、一羽の鳥が座って、大きな夕焼けを眺めていました。「こっから見る夕焼けはやっぱり一番だねえ。」と、鳥は一人ごちました。そして少し飛び出た羽を抜き取り、口にくわえると、ぼんやりと海を眺めていました。

彼の名前はカナタと言います。海猫という鳥の一種で、本来は本物の海の岩場に住んでえさを捕るのですが、今回は遠出をしてこの大河までえさを捕りにきたのでした。

ちょうど、その真下を、テトラとリンの二匹が手をつないで泳いでいました。時折ひたいの先で優しく互いをつつきあいながら、もつれ転がるように一つになりながら泳いでいきます。

時折小さな泡が二人の絡まりあうひれの間から滑り出たたかれ、さらに細やかな霧のようになって、青い海の水の中へと放たれるのでした。

海猫のカタナはちらりと、そちらを見ました。やっと今日はじめての餌にありつける、カナタはそう思いましたが、彼は二匹がじゃれあっているのを見てやめました。

「俺はな恋人同士は襲わねえ。それが俺のポリシーさ。」  
そういつて彼は優しくそんな目で二匹を見つめました。だからカナタはいつもお腹が空いているのです。彼は口にくわえた羽を、口寂しそうにくわえなおしました。

夜が訪れました。無数の星が空に輝く頃、海の中では二匹のネオンのように赤と青に明滅しながら見つめあっていました。テトラは熱

い瞳で言います。

「僕は君の事が好きだ。君はどうだい？」

その瞬間、まるで彼の体の赤い模様が、流星のように強く光ります。「私も好き。テトラの事、大好き。」

そう言つて、リンは恥ずかしそうに目を逸らし、青い体がほんの少しぼつと光りました。テトラはその言葉を聞いて、顔を真っ赤にして、恍惚そうな表情を浮かべました。

彼らにとっては二人とも、初めての恋でした。不器用ながらもただ相手のことだけを思い、大切に、大切に愛し合っていました。

今日は大きな満月です。リンの青い体は海面から降り注ぐ月の光に照らされて、いつもよりいっそう綺麗に見えます。そして、テトラの体の赤い色はリンにとって、まるで自分を導く太陽の光のように見えました。

「ねえ、リン。」

二人はずっと互いに見惚れていましたが、ふいにテトラが口を開きました。

「なあに、テトラ。」

テトラはリンの手を取ります。

「抱きしめても良い？」

「うん。」

二人は青い海の中で、しっかりと抱きしめあいました。そして一つになりました。

その日の海は、恐ろしいほど綺麗でした。夜とは思えないほど、水面を通した強い満月の一面のゆらめく光の中で、エメラルドグリーンの水草は盛大に歌い踊り、その中央で抱き合う二人を祝福していました。

まばゆい宝石を無数に散りばめたビロードの空の下、青くどこまでも広がる海の元、地球の大地の上で彼らは愛し合う一つの小さな奇跡でした。幸せというものがあるのなら、今の彼らはまさにその、

幸せそのものでした。

どうして運命は、いつもここの残酷なのでしょう。幸せの後には悲しみがあるのなら、幸せなんてなければいい。そう思わずにはいられない、孤独な夜もあります。けれど、人は幸せを求めて生きています。ただ、その瞬間の為に。

あの時、鳥は飽きずにずっとあの場所において、満月を眺めていました。そして時折そっと、邪魔しないようにテトラとリンを覗き見るのでした。

「へへへ。幸せのお裾分けをくださいな、と。」

鳥は一人ぼっちでした。けれど人が幸せな姿を見るのはそれだけで心が温かくなる良いものだ、知っていました。

始めは、遠くから、まるで岩山が崩れ落ちるような音と地響きが届いて来ました。海猫は何事かと、口にくわえた羽を落としました。それはどんとどんと近づいてきます。

それは闇の中でも月の光に照らされてはつきり見えました。それは壁でした。人間の手によって、作られたコンクリートの大きな壁が、海を二つに分けるように海の両岸から、凄いスピードで降りてきます。今日の昼によくやくそれは完成し、誰かが今開始のスイッチを押したのです。

鳥は、はっと気づいたように二人を見ました。二人は慌てた様子できよるきよると上を眺めています。テトラはかばうようにリンを片手で抱いて、熱い瞳で辺りを睨んでいました。

「危ない！」

鳥は叫びます。なぜなら今ちょうどテトラとリンの頭上に、壁が降りてこようとしていたからです。二人はその拍子に、少し体を離しました。

「もうだめだ！」

とカナタは目を閉じ、そしておそるおそる目を開けました。すると

どうでしょう。海はその壁によって完全に真っ二つになっているではありませんか。二人はどちらも無事でしたが、大きな壁の向こうと手前にバラバラに弾き飛ばされていました。こうして一度一つになった二人は、壁によって、また二つに無理やり引き剥がされたのです。

## 第二章 壁

大きな壁がどこまでも続いています。あの日の夜二人がばらばらに引き剥がされてからも、テトラは必死でリンに会う為、抜け道を探していました。けれど壁は完全に海を二つに分けてどこにも抜け道などありませんでした。

人間の事情を話せば、それは治水対策の為の大きなプロジェクトの一つでした。けれどそんなことは魚達には関係ありません。テトラは夜通し抜け道を探し続け、けれど見つけれずに元の場所へ戻ってきました。

「リン！聞こえるかい！待ってて！僕が助けるからね！」

テトラは叫びます。けれどその小さな声は壁の向こうのリンには届きませんでした。一方リンは恐ろしさで、泣きながら震えています。

「テトラ！テトラ！お母さん！お母さん！お母さん！」

リンは夜中ずつと助けを呼びましたが、誰も助けには来ませんでした。意地の悪そうなカニが、じろりと泣き震えるリンを見て、そのまま力二歩きで通り過ぎていきました。

ドンツ！ドンツ！テトラはその小さな体を壁に叩き付けて、壁を壊そうとしています。うろこは傷つき血が滲んでいます。それでもテトラは歯を食いしばり、血の涙を流しながら何度も何度も壁にぶつかっていきます。

それをカナタが空から見つけました。

「おい！お前やめろ！やめろったら、お前死ぬぞ！」

カナタはあの夜一度はそこを離れたのですが、やっぱり心配でもう一度様子を見に戻って来たのでした。

「この向こうに大事な人が、恋人がいるんだ！」

「わかった。わかったから落ち着け。お前なんかはこの分厚い壁が壊せるものか、ってやめろ！やめろったら！食っちゃまうぞ！」

海鳥であるカナタはそう怒鳴りつけました。テトラはその時に初めて我に帰って、カナタを見、後ずさりしました。

「あなたは・・・？」

「俺の名前はカナタ。見ての通り、お前らの天敵、海猫さ。」

「僕を・・・食べるの？」

テトラはおそろおそろカナタを見ました。

「食べるつもりなら、もうとっくに食べてるよ。俺はお前を見るに見かねてって、おい！」

もうテトラには何の力も残っていませんでした。彼はカナタの話を聞きながら、だんだん意識が遠くなって、ゆっくりと濃い海の底へ落ちて行きました。

テトラ達の帰りが遅いのを心配した長老が、力尽きた彼を見つけたのはその後すぐでした。カナタが見つつけさせる為に大きく鳴いたせいでもありません。

テトラは目覚めてすぐに事情をみんなに話しました。ドニエプラはそれを聞くとテトラを殴りつけ、その場に泣き崩れてしまいました。次の日も、また次の日も、テトラは別れ別れになった場所へ行つて、どうにかして向こうへ渡れないか、色々な方法を試します。けれども全てうまく行きません。そして、それはリンも同じなものでした。最後には二人は壁に体を当てて、出来る限り相手の近くにしようと思いをそばだててじっとしているのです。

そしてそれをやっぱり鳥は見ていました。

「おいお前。」

カナタは見るに見かねて、壁の上からテトラに声をかけました。テトラもずっと彼に見られていることは知っていましたので、彼を睨み返しました。

「なんだよ、食べるんなら、早く僕を食べる。ずっと待ちきれないご馳走を見るような目で僕を見るな。」

と、テトラは言いました。

「おいおい、そりやないぜ。俺はお前さんを助けてやるうっていうのにさ。」

テトラはカナタを見つめました。テトラの真ん丸な瞳に小さく火が灯っているのが見えます。

「どういうこと？」

カナタは、その瞳を見て、思いました。人が人を愛するということはこんなにも素晴らしいことなのか。こんな小さな魚さえ、これほどに力強くさせるものなのか、と。

「ずっと、お前らの事を見てたんだ。あの日から。だから、事情は全部知ってる。俺はお前らの天敵だ。だからお前らを手で引つつかんで、助けるわけにはいかねえ。それは、動物社会のルールに反することになるからな。それに俺はお腹も空いてるんだ。」

「それなら！」

テトラは声を荒げたけれど、カナタの真剣な目を見てそれ以上の言葉が続けるのをやめました。

「だが、そんな俺にも助けてやれることがある。俺には幸い翼がある。空が飛べる。だから、もしお前達が望むなら、伝えたい言葉を、向こう側に伝えてやっても良いぜ。」

カナタは何故鳥である自分が彼らを助けようと思うのかわかりませんでした。けれど彼は何だかこの魚が、とても気になって仕方なかったのです。それは今までずっと一人身だった自分が持ったことのない、愛の力がなんだかとても気になるからかもしれない。なんて、そんなことをカナタは思っていました。

「やれやれ。まったく酷いもんだぜ。」

カナタはそう、壁の上で羽を休めながら一人ごちました。彼はもう何回、壁を往復したでしょう。二人の愛の語らいのメッセンジャーとして。そう、それはこんなものでした。

「リン、大丈夫かい。一人で淋しいだろう。そばにいられなくてこ

めん。食べるものは足りていますか？寒くはないですか。ちゃんと眠れていますか？泣いていませんか？」

「ええ、大丈夫よ。テトラ。最初カナタさんが来た時はもう駄目かと思っただけれど、ちゃんとテトラの思い受け取りました。私は大丈夫。一人で淋しいけれど、優しいうつぼのおじさんが色々助けてくれて、なんとか頑張れています。お母さんは元気ですか？きっと私の事を心配してくれていると思います。とてもとても会いたいけれど私は元気にしていると伝えてください。」

それとテトラ、無茶しないでね。私、あなたに何かあつたらそれこそ死んでしまうわ。ああテトラ、でも私、あなたに一目で良い。会いたい。」

「リン、元気で良かった。僕はもう一度君に会う為なら、なんだったするよ。その為ならこの命だって惜しくはない、なんて言ったらきっと君は心配するんだろうな。でも大丈夫。君に会うまでは絶対死んだりなんかしない。そして絶対君を助けるから。リン、愛してる。」

「やだやだ、テトラ。死ぬなんて言わないで。私も愛してる。テトラ。心の底から。あなたが私を助けてくれるのを待ってる。ずっと、ずっと待ってるね。」

始終このような調子でしたから、カナタは、散々惚気やがって・・・たいがいどこいつら食っちゃおうか、なんて、優しい彼にはできるはずもないことを思うのでした。

そんな風にして、何週間かが過ぎていきました。その間に、その海に住む魚達は協力してあの大きな壁をどうにかしようと努力しましたが、どうすることも出来ませんでした。

やがて、彼らの間になにやら不穏な噂が広がり始めました。それはもうすぐ伝説の嵐が来るという噂でした。

「伝説の嵐？」

「ああ、何百年かに一度やってきて、全てをめちゃめちゃにして去

つてしまつんだ。今回のことで海の神様が怒つて、きつと嵐が来るんじゃないかつて噂さ。」

その噂はすぐに長老の耳にも届きました。長老はすぐに占星術の本を開き、今年の星のめぐりついて調べました。そして彼は知ったのです。今年が百年に一度の大きな嵐の年であることを。そしてそれがちょうど、1週間後の夜に訪れることを。

「良いか、お前達。決して伝説の嵐の夜に外へ出てはいけないよ。もしも外へ出たら今までであったことのないほどの強い流れに呑み込まれて、死んでしまうのだからね。」

長老は人々を集めて、そう告げました。彼らは口々に、自分達に続く不幸を嘆きました。彼らの中には壁によつて別れ別れになった者も少なくはなかったのです。その上にそんな嵐が来るなんて、と彼らは抱きあつて泣きました。

その時、ふと長老はテトラを見ました。テトラは真つ赤に今にも燃え出しそうな瞳で、長老を見ていました。長老は何だかとても嫌な胸騒ぎがして、テトラの元へ行こうとしましたが、他の集まった魚達にさえぎられて、いつのまにかテトラを見失つてしまいました。

テトラは海を泳いでいました。その日はテトラは朝早くに自分の小さな緑色の岩の寢床から出て、色々な場所へ一人で出かけました。始めテトラは自分が長老に拾われた自分が長老に拾われた、小さな砂利の敷き詰められた浅瀬へと向かいました。あの日のことはほとんど覚えていません。けれど父さんと母さんが手をにぎつて、僕を守るように抱きしめてくれていたことだけは、そのぬくもりと共に覚えているのです。

ドニエブラさんの家にも行き、もう今は壊れて穴だらけのホタテ貝の檻の中をゆつくりと泳ぎました。貝の中の泡が、遊ぶようにテトラのひれに絡んで、そして海面へ登つてゆきました。リンとよくかくれんぼをした虹色の水草の林も、流れの早い岩場のすべり台にも

全部一人で行きました。そして、太陽が真上に昇ったころ、テトラは水中からその強い光をあおいで、うなずくのでした。

昔、長老が自分に言ってくれたことを覚えています。

「お前のその赤い色は、お前の父さんと母さんから受け継がれたものだ。お前はその印にかけて、強く優しい子にならなければいけないよ。」

長老の家のドアの前に立って、テトラはそんなことを思い出していました。

「だめだ、テトラ！そんなことをすればお前は死んでしまう。リンだってそんなことは望んでいない。やめるテトラ。そんなことをしてはいけない！」

長老は銀のひげを振り乱しながら、テトラを説得しようとしていました。それはテトラがこう長老に自分の決意を伝えたからです。

「伝説の嵐の夜に、僕はその波に乗って、リンに会いに行きます。」

### 第三章 掌

海猫のカナタは耳を疑いました。テトラがリンに伝えてくれと言った内容が恐ろしいものだったからです。

「お前、なんて、なんてことを……。。」

カナタも、嵐のことは知っていました。鳥達の間でも噂になっていたので。けれどまさかテトラがそんな事を考えているとは夢にも思っていなかったのです。

「お願いです、カナタさん。早くリンに伝えて下さい。リンは僕が会いに行くのを待ってるんです。」

テトラはまたまっすぐな瞳でカナタに向かってそう言いました。カナタは言います。

「テトラ。お前の思いは良くわかったよ。俺が何とかしてやるから、考えなおせ。テトラ。な？」

カナタは羽を少し震わせながら、テトラに訴えました。けれどテトラは目をそらさずに、答えます。

「ありがとう、カナタさん。でもリンは僕が守る。その為に僕はここに生きています。だからお願いです。早くリンに伝えてあげて下さい。」

カナタはその赤い瞳を見ていると、もう何も言えなくなって、悲しい気持ちでリンの所へ行きました。

「良いかい、リン。明日の嵐の晩に僕は君に会いに行く。この壁の所で待っていてくれ。僕は君を見つけて、君を抱きしめるから。」  
リンは答えます。

「だめよ、テトラ。そんなことをしてはだめ。そんなことをしたら、私達死んでしまうわ。」

「僕は君と離れ離れになってからずっと考えていたんだ。僕は君がいなくちゃ生きていけない。僕と君は二つで一つなんだって。ねえ、

リン。君もそう思わないかい？」

「ええ、私もよ、テトラ。私もずっとずっと怖くて、淋しかった。でも……。」

「今君に会わなければ、もう二度と君に会えない。だから、お願いだよ、リン。明日月が真上へ昇る時間に、ここへ来て。僕もここで待ってる。」

その日の夜にドニエプラは赤い体を震わせながら手を合わせて祈っていました。

「テトラ、お願いだよ。リンを守ってやっておくれ。リンを助けてやっておくれ。私にはもうリンを守れない。テトラお願いだよ。あの子を守ってやっておくれ。」

ドニエプラはずっと祈り続けるのでした。

そして嵐の日がやってきました。少しずつ風の強まる中で、ぎりぎりまでテトラとリンとカナタの三人は壁を挟んで話していました。

「良いかい、リン。もし僕が君の所へ来ることが出来なかったら、なるべく早く安全な所へ行くんだよ。」

テトラはそうリンに届けました。リンは答えます。

「そんなの嫌よ！必ず、必ず来て。」

カナタはじつと二匹を見つめていました。そしていつか俺にもこんな風に愛しあえる人が出来たらいいな、と考えていました。

夕刻です。もうカナタでも飛ぶのが難しいほど風が強くなりました。空も、黒い雲が渦を巻いています。

「カナタさん、最後にもう一度、リンに愛しているって伝えてもらえますか。そしたら、カナタさんは、安全な場所へ避難して下さい。」

カナタにはテトラがまるで海を渡る大きな船のように見えました。まるでどんな荒波も乗り越えてしまう大きな船のように。

「ああ、テトラ。また明日・・・会えるよな。」

テトラの瞳の明かりが、少しだけ翳りました。

「カナタさん、今まで、本当にありがとうございました。僕、あなたが大好きです。カナタさん、本当は僕も怖いんです。僕にこんな大きな壁越えられるでしょうか。僕にもあなたみたいに羽があればいいのに。」

テトラは言いながら、壁で別れ別れになって初めて大粒の涙を、その真っ赤な瞳から落としました。けれどその瞳はずっと、カナタを見ていました。カナタは答えました。

「お前ならやれるよ。俺には分かるのさ。俺の大好きなお前になら、こんな壁絶対越えられる！俺が保障するぜ！」

カナタも泣きながら答えます。

「カナタさん・・・。」

「さあ早くリンに会いに行って抱きしめてやんな！そんなでもって俺様にもっともつと仲の良い所を見せつけてくれよ！」

もうカナタはテトラを見ることが出来ませんでした。カナタはそのまま飛び立って、リンにカナタの言葉を伝えに行きました。

テトラはあらん限りの声で、ありがとございましたと、叫びました。そしてテトラはいつかカナタさんにも愛する人が出来るだろうと確信していました。

そして、夜がやってきました。テトラは黒雲をにらんで立っていました。黒雲は壁を中心として、丸く渦を巻いています。もういつもならつるさい森の動物達や、鳥の声も聞こえません。海の中にも誰もいません。海は濁り、ちぎれた水草や小石が凄いスピードで流れていきます。それは時折テトラの体に当たるのですが、テトラは不動のまま空を睨んでいました。もうすぐ月が天頂に達する時刻です。

その頃長老も、自宅で同じように水面の向こうの空を眺めています。

た。そして思っていました。

「あんなにも小さくて可愛かったテトラが、もうこんなにも大きくなったのか。お父様、お母様。あの子を止められなかった私をお許し下さい。けれどもお父様とお母様こそ、知ってらっしゃいますよね。愛は何よりも強いのです。どうかあの子をお守り下さい。テトラをお守り下さい。

長老は手を空に差し伸べて、もう会うことの出来ないかもしれないテトラに言いました。

「ああテトラよ。運命をぶち破れ！壁を越えろ！テトラ！ああテトラ！大事な私の子……！」

長老だけではありません。二人のことを知っているその海の全ての生き物が、家の中で嵐の恐怖に震えながら二人の事を思っていました。二人が無事に再会を果たすことを。

テトラは目をつぶりました。ごうごうという水の中で、誰かが自分に話しかけるような声がしたのです。けれど、何も聞こえはしませんでした。ただテトラは何だか体中に力が湧いてくるようなそんな気がして、今の自分なら、例えあの壁だって越えられる。そんな気がしたのです。テトラは目を開くと、あの壁目がけて、凄いスピードで泳ぎ始めました。

それはまるで弾丸でした。水草が当たっても、石や木が当たってもテトラは壁目がけて泳いでいきました。

壁まで来ると、流れはいっそう強さを増しました。河を上ってきた波が壁にぶつかって渦を巻いています。テトラの方が河下なので、海からの波が強いのです。この分なら、きっとリンは大丈夫、とテトラは思いましたが、テトラ自体は波にもまれてくるくるくるくと遊ばれていました。テトラは待っていました。一番大きな波が来たら、その波に乗って、向こう側へ行こう。それまで持ちこたえられれば……。

風はどんどん強くなり、雨も凄いスピードで降り始めました。森の木々が叫ぶようにゆれ、夜の海はまるで機嫌の悪い巨人の子供が駄々をこねたように荒れ狂っています。

テトラはもう意識ももうろうつとする中でリンの事だけを思っていました。

「リンに会いたい。リンに会いたい。リンに会えたらこんな命なんていらぬ。」

テトラは神に祈りました。

「どうか神様。僕をリンに会わせて下さい。」

それはリンも同じでした。河上なので河下に比べれば少しは穏やかな海の中で、リンもテトラを待っていました。祈りながら。

「神様お願いします。テトラに会わせて下さい。」

雷がひどくなってきました。まるで、二人の願いを神様が聞いたかのように、いくつもの雷が森に海に落ちていきます。海に落ちた雷は、水の上を走り消えていきます。テトラもリンも少しピリピリと体に電気が流れるのを感じました。その時でした。大きな大きな波が河下からやってきたのは。

それは全てを呑み込みながら、壁に向かって登って来ます。テトラは最後の力を振りしぼって、その波のてっぺんに向かって泳ぎました。泳いで、泳いで、泳いで、そして波は壁まで辿り着いたのです。

テトラの体は真っ赤に光っていました。それは太陽の光にも負けぬ美しい強烈なルビーのように赤い色でした。波のてっぺんで壁を越えながら、ただ、彼はリンに会うことだけを考えていました。そして、リンはその赤い光を見つけたのです。すぐにリンにはそれがテトラだとわかりました。リンは力いっぱい泳いで、泳いで、泳ぎました。いつしかリンの体もまるで宇宙から見た地球のように、青

く優しいアメジストのように光っていました。

二人は互いに気づきあい、波にもまれながら、必死で相手に向かつて泳ぎました。けれどなかなか辿りつけません。テトラの体からは血が吹き出し、辺りを染めています。リンはそんなテトラを抱きしめたくて、必死で泳ぎ続けました。

そして二人はもう一度、抱きしめあつたのです。

「リン、リン、リン、会いたかった。」

「テトラ。私もよ。会いたかった。」

二つの赤と青の光は一つになり、固く結びついています。リンが言いました。

「ずっと、ずっと、待ってたんだからね。一人で、本当に怖かったんだよ。」

「うん、リン。ごめんな。もう絶対君を離したりなんかしない。これからはずっと一緒だよ。」

抱き合つた彼らは、そのまま大きな渦に巻き込まれ、もはやどちらが天でどちらが底なのかさえ、わからなくなっていました。所々で渦の起こす摩擦で、ぴかぴかと辺りが輝いています。引き裂かれるような痛みとごうごうという音の中で、リンが言いました。

「ねえテトラ。私、震えが止まらないの。もう一人にはなりたくない。もう絶対一人はいや。お願いよ。私を置いていかないで。ずっと一緒にいて。どんな暗闇の中でも、私のそばにいて。」

テトラはリンの手を握って答えました。

「リン。僕はここにいるよ。いつも僕はここにいる。リン。僕の鼓動が聞こえるだろ。僕はずっと君を抱きしめているよ。大丈夫、僕らはもうこれからずっと一緒さ。もう二度と君を離さない。」

リンは泣きながら、テトラに言いました。

「うん。あなたさえいれば私はもう何もいらぬ。私は、大丈夫。」  
もう彼らには、周りの音も景色も何も見えなくなってしまうていま

した。ただ彼らにわかるのはお互いがそばにいる、その温かさだけでした。

「良いかい。リン。僕にしっかり掴まっているんだ。僕の手をしっかり握ってるんだよ。」

「ええ、テトラ。」

二人は手をしっかりと握りあっています。

「僕ら二人どこまでもいこう。二人どこまでも一緒に。遠く二人一緒に見上げた、あの星空までも。」

「ねえ、テトラ。愛してる。あなたに会えて良かった。」

リンはテトラの胸に頭をよせて、笑顔でつぶやきました。テトラも、リンをしっかりと抱いて、こう答えました。

「僕もだよ、リン。愛してる。」

恐ろしい嵐は、夜中続いていました。それはまるで天の神様が、悲しみに泣いているかのような、切ない嵐でした。

## エピソード

次の日の朝です。まるで昨日の嵐が嘘のように空は晴れ上がり、動物達は互いの無事を確認しあっては抱きあつて、喜びの涙を流していました。

海猫のカナタは必死に空を飛んで、テトラとリンの姿を探していました。

皮肉なことに、嵐によって海を分けていた壁は、波に吞まれてばらばらに壊れてしまいました。

カナタは大声で泣きながら、彼らを探し続けました。けれど、どれだけ探しても、夜になっても、二人の姿などどこにもありません。辺りにはカナタの探す泣き声だけが、いつまでも響いていました。

空を見上げれば、星が見えるでしょう。それから海猫はいつも空を眺める時、その星のどこかでなんだからまるで二人が幸せに暮らしているような気がしてならないのでした。

そんな時、カナタはくわえていた羽を吐き捨てると、浮かんだ涙を羽でぬぐいます。

「けっ。いつまでもいつまでも、惚気やがってよう。」

そして大きく笑って、また、獲物を探すために、大空へと飛び立って行くのでした。

幕。

2006年6月30日。梅雨の晴れ間に。クミさんありがとー！大好きよー！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2348k/>

---

掌・ネオンテトラの恋

2010年10月10日13時09分発行